

# 吉野川歴史探訪 旧吉野川 その1

～ かつての本流は洪水と水害の常襲地帯、そして利水の要 ～

お疲れ様です。別宮川三郎です。台風 19 号豪雨は、中部から関東東北の広範囲にかけて、激甚な水害・土砂災害を発生させました。

宮城県、福島県、茨城県、埼玉県、栃木県、長野県、新潟県の7県では、20水系71河川の140箇所です。堤防が決壊しました。(令和元年10月末現在)堤防の決壊は、洪水が凄まじい勢いで低いところへ向かって流れ泥海となり、尊い命と貴重な財産を奪いました。また、大規模水害からの復興復旧には、途方もない時間と労力が必要となります。亡くなられた方達のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様は今後の生活への不安など心労は絶えないことと思います。一日も早く日常を取り戻せることを心より願っています。

全国で毎年のように発生する激甚な洪水と水害に対して、どのように向き合っていくのか？命を守るためにどのような行動を取るべきなのか？いつも考えさせられます。私は、堤防やダムでは防ぎきれない大規模水害は必ず発生するという前提の下で、洪水を我がことと考へ、私たちが暮らす地域の自然災害に対するリスクを知って、有事には適切に避難できるようにすることが、自らの命や大切な人の命を守ることに繋がると考えています。

さて、吉野川歴史探訪ですが今回号からは、吉野川の支川に目を向けたいと思います。今回号は、かつて吉野川の本流でありながら、藩政期の吉野川と別宮川を繋ぐ新川掘抜工事により、その地位を奪われた「旧吉野川」について探訪したいと思います。

## 1. 「旧吉野川」は、かつての四国三郎吉野川

藩政期はじめの吉野川下流の流れは、東へ向かい江川、神宮川を分合流しながら鮎喰川扇状地の影響を受け、その流れを大きく北向きに変えて、徳島平野北部を貫流し河口へ注いでいましたが、藩は、徳島城の防御、舟運路の確保のため、吉野川の水を引き込むことを決め、1672年(寛文12年)に、吉野川と別宮川(現吉野川)をつなぐ、「新川掘り抜き工事」を行ったのでした。ところが、新川を流れる土地が、吉野川を流れる地域よりも低かったために、吉野川の水は、別宮川へ流れ込むようになり、洪水時は本流の如く流れ、平常時は水勢が衰えていきました。(図3, 4参照)

その後も別宮川の成長を止めることができず、明治末期から昭和初期に行った別宮川の改良工事により、吉野川の洪水を全て別宮川で流すこととなり、第十堰下流の吉野川は、本流の洪水処理河川としての役割を終え、川の名も昭和7年に別宮川が吉野川へ吉野川が旧吉野川へと呼び名を変えたのでした。

しかし、それまでは、旧吉野川は、吉野川の本流で洪水と水害の常襲地帯でした。現在も当時を忍ばせる高地蔵、印石、城構えの家などの洪水遺跡が多数残されています。(Our よしのがわ VOL23, 24 参照)

当時の様子を山田家文書など洪水記録から探訪しましょう。

## (1) 藩政期の大洪水 農民の苛酷な暮らしの様子を伝える山田家文書

享保7年(1722)6月、7月、8月と三度の洪水で大被害が発生しました。組頭庄屋山田家では、その時の様子をまとめ、郡代に被害状況と農民の苛酷な生活の様子を報告しています。

そのうち、住吉村(藍住町住吉)の報告では、流失を免れた家屋は、高い石垣を築いた富農たちだけで、家屋を失った農家の大多数は、堀立小屋で、銅・釜とわずかな農具をもつだけという極貧状態に苦しんでいたことが記されています。

また、享和元年(1801)8月にも洪水があって、山田家では「風雨出水二付川成砂入土流立毛損亡約帳」をまとめ、郡代に報告しています。それによると川の流路が変わって耕作不能となったところや、砂礫が流れ込み河原同然となった田畑が、村の随所に見られる被害地図もあって、洪水の生々しさを具体的に伝えています。

### 資料1 かわなりち 川成地など確認できる被災状況を表した古図



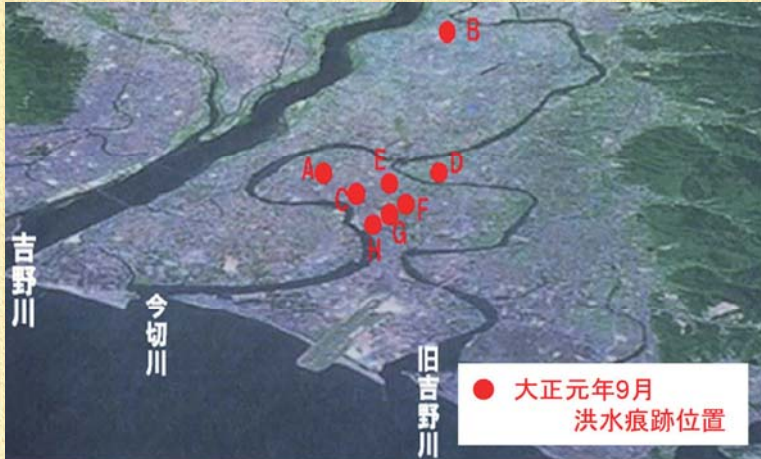
## (2) 大正元年9月洪水 計画規模(年超過確率 1/150)に匹敵する大洪水

大正元年9月洪水は、旧吉野川が吉野川であった頃の最後の洪水で、堤防の決壊等により大規模な氾濫が発生し、死者81名、負傷者53名、不明者14名、床上浸水約26,700戸、床下浸水約16,400戸、全半壊家屋約1,220戸におよぶ激甚な被害となりました。この時、家が流されてきたという生々しい恐ろしい話を親から聞かされたことや、古い民家の納屋の壁や戸袋に洪水の大きさを物語る痕跡が残されていました。

国土交通省では、吉野川が、現在のダムや河川の整備状況で、年超過確率1/150(計画規模)や1/1000以上(想定最大規模)の豪雨による洪水が発生した場合の浸水想定区域や浸水深などを作成し公表しています。この浸水深と大正元年9月洪水の痕跡水位の浸水深を比較した場合、当時と堤防の整備状況や川底の高さや形などが大きく異なるため一概に比較できませんが、それでも、大正元年9月洪水の痕跡水位の浸水深は、計画規模(1/150)降雨の発生に伴う浸水想定区域の浸水深と同等であり、大洪水であったことが理解できます。(図1参照)

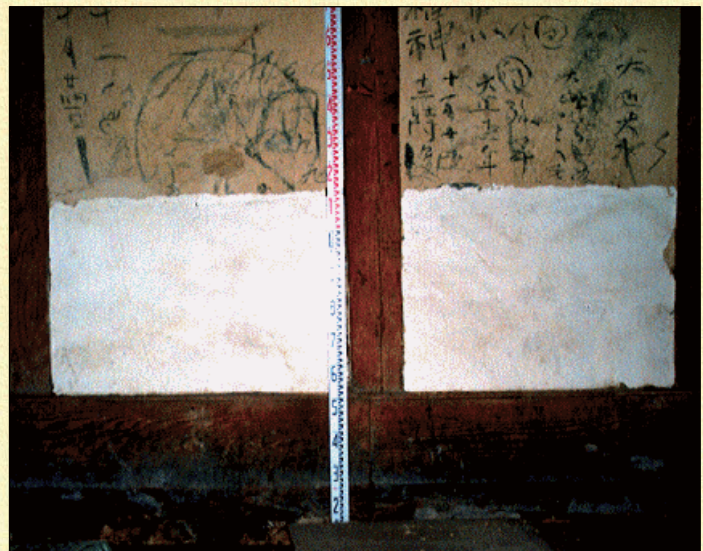
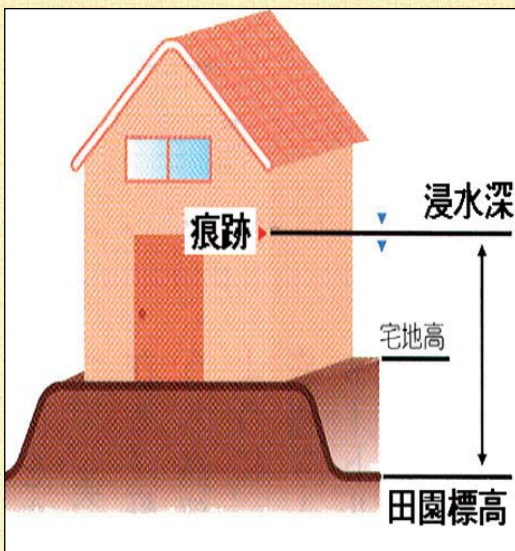
現在、旧吉野川は、吉野川の洪水から完全に切り離され、北部地域は安全な土地へと生まれ変わり大きく発展していますが、吉野川の本流だったころは、洪水と水害の常襲地帯だったのです。

資料2 大正元年9月洪水痕跡



大正元年9月洪水 各所の浸水深

痕跡位置	①痕跡標高TP	②宅地標高TP	③田畑標高TP	浸水深①-③
A家	3.80m	2.40m	0.89m	2.91m
B家	7.29m	5.14m	4.74m	2.55m
C家	3.35m	1.92m	0.35m	3.00m
D家	5.11m	3.11m	1.17m	3.94m
E家	3.35m	2.08m	0.44m	2.91m
F家	3.38m	2.01m	0.46m	2.92m
G家	3.07m	1.79m	0.51m	2.56m
H家	3.65m	1.67m	1.02m	2.63m



【D家の大正元年9月洪水痕跡】

北島町のD家宅には納屋に痕跡が残っていました。その痕跡高を測定すると納屋の土壁には、宅地地盤から2.3mの高さでした。

さらに水田高からだと3.9mにもなり、いかに大正元年の洪水が大規模であったかを痕跡から知ることができます。

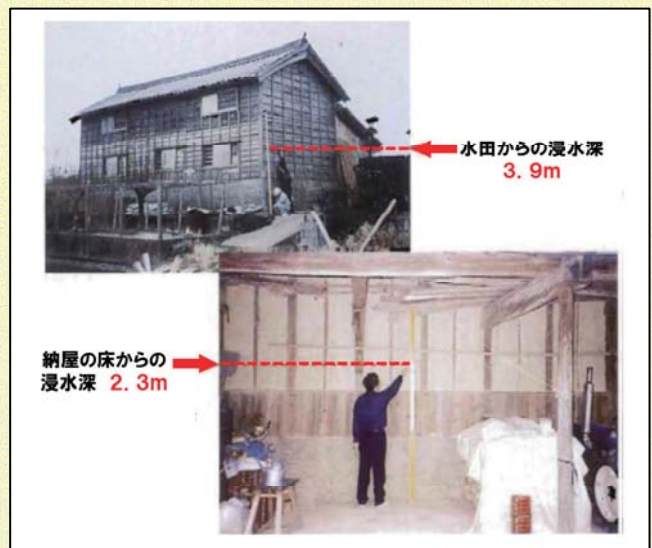
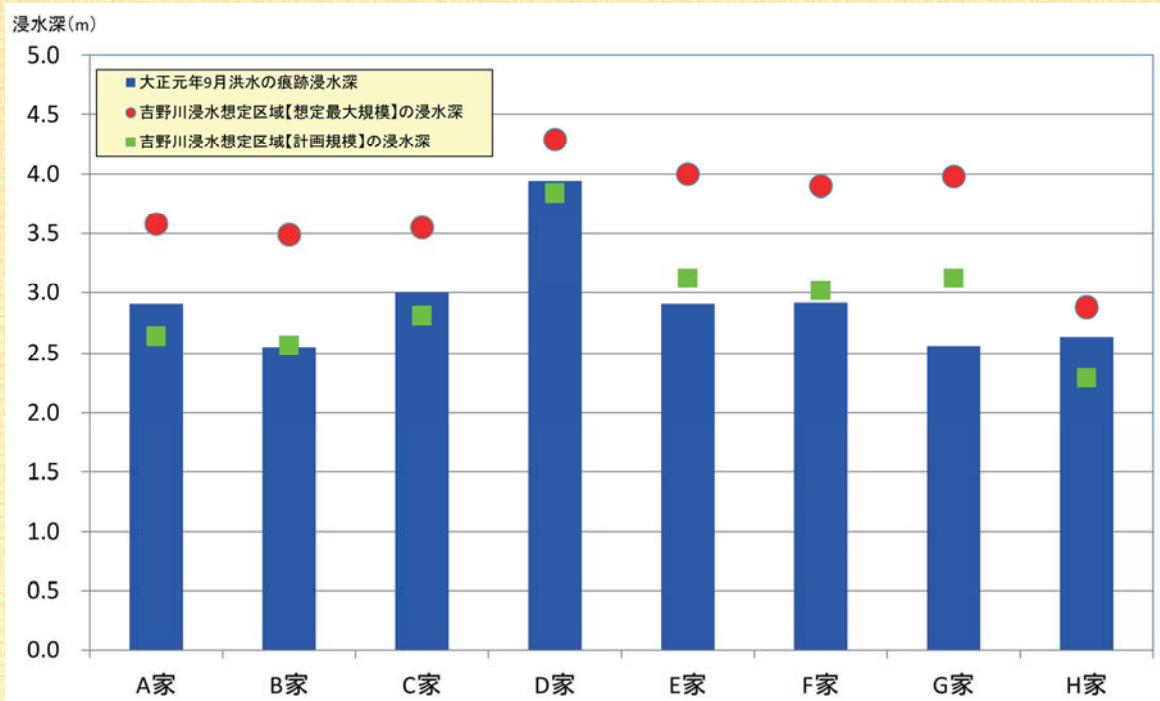


図 1 大正元年9月洪水の浸水深と浸水想定区域の浸水深との比較



### (3) 大正元年9月洪水 古老が語る大洪水

大正元年9月洪水は、上記の通り、各所で記録が残されていますが、かつて、古老が堤防決壊時の様子を語った記録が残されていますので紹介しましょう。

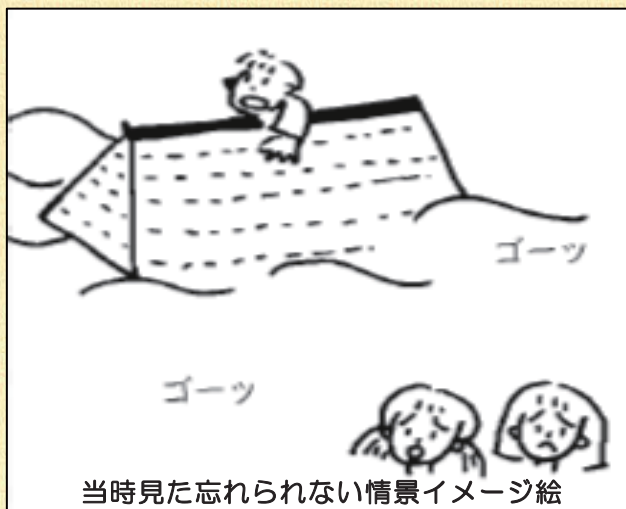
決壊した場所は、鳴門市の堀江南小学校東側の堤防です。そこは、今切川が分派した下流で、当時、白線の堤防を明治のはじめに築いて洪水に備えていました。現在、整備している堤防は黄線ですが、これは、吉野川の洪水を別宮川で流し、分離したため川幅を狭めたもので、背後地には住宅地が形成されています。言い換えれば、吉野川の本流時代、少なくとも先人達は、白線で着色した川幅が必要と考えていたのです。それでは、古老の体験談を紹介します。



## 【古老が語る壮絶な洪水】

私は、明治39年生まれで、7歳の時に大正元年の洪水を経験しました。家は堀江南小学校（現在の鳴門市大麻町）のすぐ近くにありました。

「土手が切れるぞ」という声が聞え、それから、小学校の隣の土手が切れました。友達の家を蔵の2階に避難して、一緒に外を見ていると、川の中を藁屋の家が流れていくのが見えました。その家の上には、男の人がしがみついております。「どこまで行くのだろう、おそろしい」と思いました。牛も馬も流れました。水はゴーツと音を立てて流れていました。7歳でしたが、その情景は今でも忘れることができません。堀江南小学校も壊れて、小学校はしばらく休みにになりました。



当時見た忘れられない情景イメージ絵

徳島毎日新聞（大正元年9月26日）

倒壊せる堀江校

板野郡堀江南尋

高校は講堂一棟、

新築教室2棟倒壊、

残存2棟、堀江村

は山地一部を除く

悉く浸水

△倒壊せる堀江校  
堀江尋常高等校は講堂一棟、新築教室二棟倒壊、残存二棟、堀江村は山地一部を除く悉く浸水、家屋倒壊三戸、同

堀江南小学校（鳴門市）の被害を伝える新聞

## 2. 旧吉野川は利水の要

### （1）藩政期の水利用

吉野川下流域は、古代よりしばしば洪水に見舞われ、家や田畑を流され、南北両岸の交通も途絶えていました。この洪水がもたらした利益と言えは、藍作地への「流水客土」<sup>りゅうすいきゃくど</sup>くらいで、平常時の水は舟運に利用される程度でした。

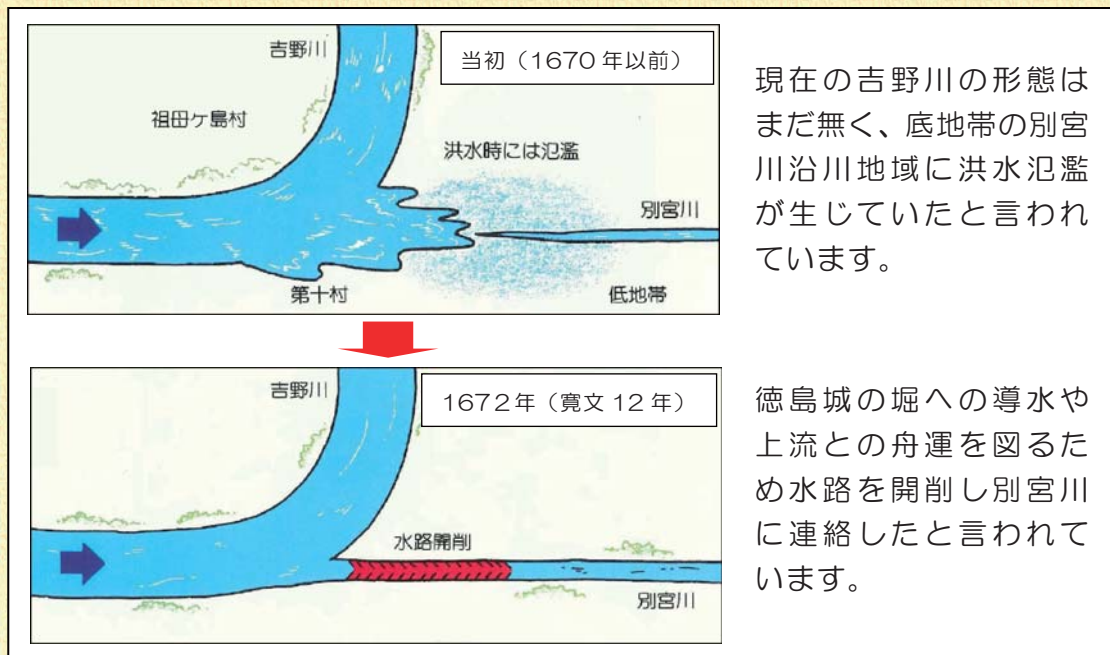
一般的に、多くの大河川は早くから農業用水として利用され、その地域の経済的発展の原動力になっていましたが、吉野川では、沿岸の耕地が比較的高く、吉野川の水を直接取水することが難しかったことに加えて、洪水氾濫が稲作を許さず、藍作が盛んで、稲作は藍作に劣る立場で展開されていました。

このため、藩政期に吉野川の水を農業用水として必要としていたのは、主に旧吉野川の河口域で開発された新田地域でした。しかし、その水も「新川掘り抜き工事」によって、徳島城への導水や上流との舟運を図るため、藩の軍事用水として徳島城下に横取りされました。先人達は、別宮川に水流が傾くのを阻止するために第十堰を築造し、何とか最低限の利水機能を必死に守ってきたのです。当時から旧吉野川と今切川は、水田灌漑の根幹をなすもので、万が一、その機能が失われた場合は、数千町歩の田園は灌漑の方法を失い、海に近い村々は塩害により、稲は枯死し死活問題となっていたのです。（図3参照）

図3 新川掘り抜き工事と旧吉野川河口域の水利用



図4 新川掘り抜き工事



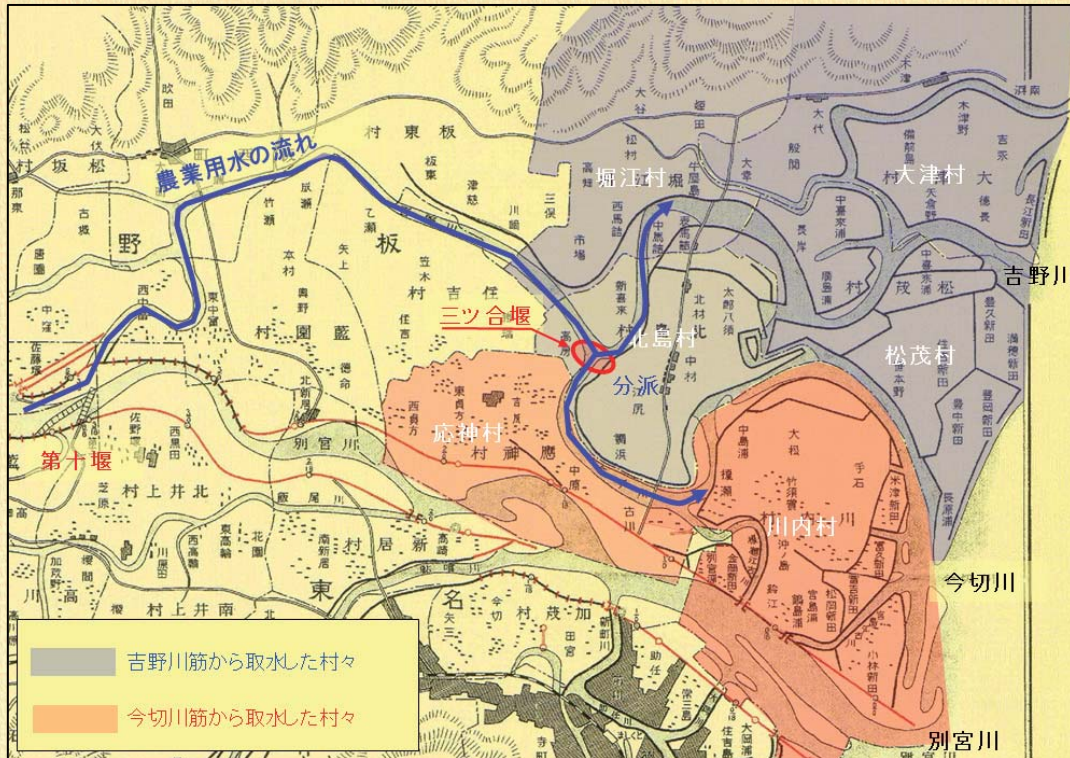
(2) Mitsugata Dam and the Great Dispute: Water Dispute of Showa 5

第十堰から取り入れた水は、新田開発地域の命の水でした。その貴重な水は吉野川を下り、途中、北島村で今切川を分派して河口に注いでおり、吉野川筋の水は松茂村、北島村、大津村及び堀江村の4村が、今切川筋の川内村、応神村の2村が農業用水として利用していました。

吉野川と今切川への水量は、古くから北島村高房に「三ツ合堰」があって、吉野川7、今切川3の割合で分けていました。しかし、洪水により堰が傷むと地盤が低い今切川への流れる水量が多くなり、日照りが続くと両川の農民は堰の監視に目を光らせて、流血の水争いがしばしば行われていました。(図5参照)

それでは、この水争いについて徳島毎日新聞、吉野川治水史新考などを参考に探訪しましょう。

図5 三ツ合堰の分水量を巡り対立した村々



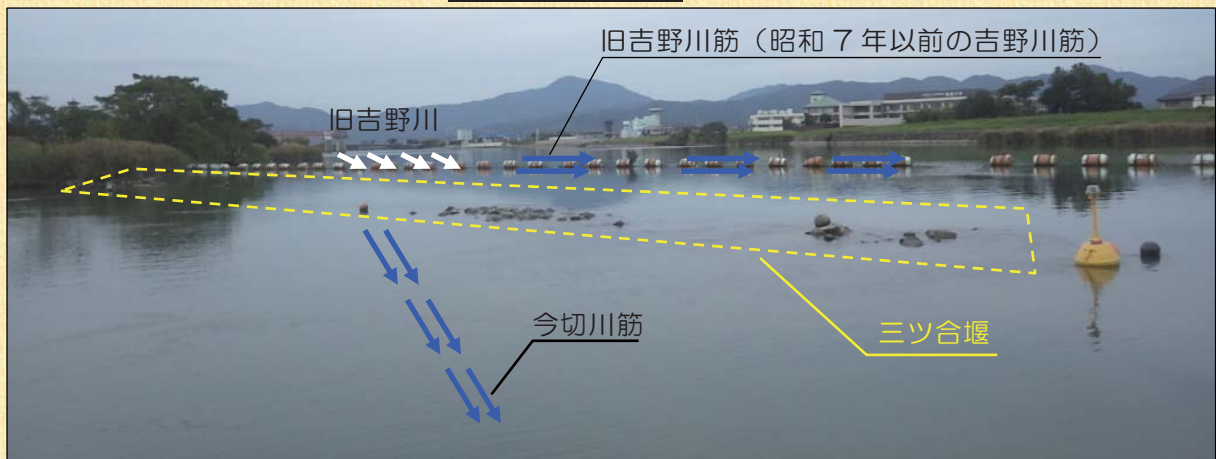
昭和5年は、小雨で全国的な干ばつとなりました。吉野川でも水位が低下し麻名用水では明治41年の通水以来、最低水位を記録し水利組合創設後はじめて「番水」を行ったと言われています。この年は吉野川の水量が少ないことに加えて、第十樋門取水口の土砂堆積の影響もあり流下水量が不足していました。今切川では塩水が遡上し稲の作付けが不能となっていたため、今切川筋2村の人達が、三ツ合堰の分水量の調査に向かったところ、考えられない工事が実施されていました。

そもそも、水争いの原因となった「三ツ合堰」は、吉野川筋4村に明治30年から今切川2村も加わって、6村共同で管理していましたが、大正12年に第十樋門が設置され今切川2村が脱退し、その後は、吉野川筋4村が管理をしてきました。

三ツ合堰の長さ、高さには決まりがあり、当時、県から許可されていた堰の施設規模は、東から約7m以内、高さは干潮面までに限る。舟筏の進行は屈曲させてはならないというものでした。また、この堰の認可は、昭和2年6月18日で、石の投げ込み工事は、昭和2年9月30日限り禁止されていましたが、水量が少なくなると今切川へ多くが流れるため、吉野川筋4村の人達は、少しでも多く吉野川へ水を引き入れるため決まりを破って、石の投げ込みを行い、堰の長さを約13mに、そして、高さを満潮面以上にしたのです。

今切川筋2村の人達は、思いも寄らない勝手な行為に憤慨し、川内村長、応神村長は、村議や有力者20名余りを帯同して、6月20日に県庁の内務部長を訪ねて、即時解決を陳情しました。これを受け県は、知事、土木課長など実地視察の結果、6月26日に堰を原形通りに撤去するよう命じました。

図 6 三ツ合堰



しかし、吉野川筋4村は、県の解決策は不等不公平と激高しました。吉野川筋4村の人達は、堰の元々の長さは約14mであって、うち、約7m舟通し、約7mを堰いていましたが、次第に川幅が約20mまで広がったので、舟通しを約7m残して、約13mを堰き止めたもので、舟通しの高さは、干潮時に水深を約60cm確保せよと言われても、そうすれば水量は全て今切川筋に流れてしまうことや、干潮時における船の通行がこの場所では不可能で、満潮時の水深が約90cmで平田船が通行していることを主張したのでした。吉野川筋4村の人達は不満をもち、6月27日に大挙して県に殺到しようとしたのですが、45名の警察官によって吉野川橋の北詰で阻止されました。

その後、県の仲裁の条件通りに堰を解放することで一度は解決しましたが、吉野川筋の人達による堰の撤去は申し訳程度に行われ、完全な解放をしていないので、期待の水量が得られない今切川2村の人達は激高し、両村民約300名が6月29日に三ツ合堰の現場に押し寄せようとした。しかし、村境、鯛浜橋に警察官を配置し何とか村民を喰い止め、一部の代表者で現場の状況を検分することになったのです。翌30日に村長他50名程が知事と会見し、堰に不当に投げ込まれた石の撤去を求めました。

県では、知事を中心に協議した結果、公式の行政部の命令を以て投げ込み石の撤去を命じたのでした。また、この結果として吉野川筋への水量が減るので、塩水の逆流を防ぐため大津村徳永地先の徳永橋上流に仮橋留堰を築造することになりました。これでもって、連日に至る水争いも一先ずけりがついたと徳島日々新聞は報じていますが、7月3日の新聞記事によると応神村がまた陳情していることから、命令通り堰が撤去されたのか疑問が残ります。

その後、昭和11年今切川、昭和24年旧吉野川にそれぞれ潮止水門がつくられて、ようやく水争いは影を潜めたのでした。かつて、この川は舟運の価値が高く、穀倉地帯の運河のみならず、吉野川上流への船の往来も盛んでした。この地域は、今では、農業用水のみならず工業用水、水道用水など豊かな水を背景に発展を続けています。

今月号は、旧吉野川の下流部を探訪しました。次号は、旧吉野川最大の支川である宮川内谷川を探訪しましょう。